

論文審査の要旨	
筆頭著者（学位申請者）氏名	清水 梨々花
主論文の題目 および 掲載・審査委員	題 目 Factors Influencing Self-Stigma in Bipolar Disorder: A Survey of Japanese Outpatients (双極性障害患者におけるセルフスティグマ要因の分析：日本人外来患者調査)
	掲載誌 Journal of St. Marianna University 2025; 16: 23-31
	主査 橋口 さおり
	副査 幸田 和久 副査 古田 繁行
[論文の要旨・価値]精神疾患患者のスティグマは重要な課題のひとつである。スティグマには社会的スティグマとセルフスティグマがあり、複数の精神疾患をまとめた調査ではセルフスティグマは症状の増悪、QOL 低下、自殺リスク増大につながることを示されている。しかし双極性障害に特化した研究は少ない。本研究は日本における双極性障害患者のセルフスティグマ強度に関連する因子を明らかにすることを目的とした。[方法]聖マリアンナ医科大学病院、聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院の精神科外来通院中の双極性障害患者を対象に、質問紙を用いた調査を行った。セルフスティグマの測定には Japanese version of the Self-Stigma of Mental Illness Scale(JSSMIS)、スティグマへの抵抗の強さは Brief Version of the Internalized Stigma of Mental Illness Scale(ISMI-10)のサブスコアを用い、高セルフスティグマ群（高 SS 群）と低セルフスティグマ群（低 SS 群）に分けて特性の解析を行った。有意であった因子は多変量ロジスティック回帰分析を行った。[結果] 127 名が解析対象となった。高 SS 群は低 SS 群と比べて JSSMIS 合計スコアと ISMI-10 合計スコアが高かった(JSSMIS: $p<.0001$, ISMI-10: $p<.0001$) が、スティグマ抵抗スコアは有意に低く ($p<.0001$)、経済的支援（生活保護、障害年金）の利用率が高かった($p=.001$)。多変量ロジスティック回帰分析では、高 SS 群は社会的スティグマ抵抗性が低い傾向にあり ($OR=.007$, $95\%CI=.008-0.07$)、経済的支援の受給とも関連が示唆された。[考察] 本研究は双極性障害の患者のセルフスティグマと公的支援の受給とが関連することを示した初めての研究である。セルフスティグマの高さと経済的支援の利用との間に正の相関があり、他国とは逆の傾向になった。日本は集団からの逸脱は「恥」とみなされる集団主義文化である。経済的支援の受給は社会からの逸脱を意味し、セルフスティグマを増大させる可能性がある。社会的スティグマ抵抗性が強いほどセルフスティグマは軽減することは先行研究を支持するものであった。[結語]公的支援を受給している双極性障害患者は疾患の苦痛に加えて自身が社会的弱者と捉える苦悩に繋がる可能性がある。医療者は公的支援を提案する際、心理状態に合わせた介入が不可欠である。	
[審査概要] 審査は主査と副査 2 名によって行われた。プレゼンテーションはわかりやすく工夫されていた。質疑応答では、指標選択の理由、海外とは異なる「恥」の文化が双極性障害の患者に及ぼす影響について詳細な説明を求めた。また貧困など社会的背景との関連についての質問に対し、本研究の限界と今後の展開も含めて妥当な回答が得られた。	
最終試験結果の要旨	
[研究能力・専門的学識・外国語（英語）試験等の評価] 申請者は関連する領域に関して幅広い知識を有し、研究を遂行する能力があると判断された。発表、質疑応答を通じて真摯な態度で臨んでおり、学位授与に値する人物と判断した。英語は引用文献に用いたものを提示し、指定した箇所をその場で読み、訳すことで評価し、十分な読解力があると判断した。精神疾患では日本の文化に裏打ちされた対応が欠かせない。今後は定性的な研究も展開することで、この領域の発展が期待できる。よって申請者の清水梨々花君は学位授与に相応しいと判断する。	